学長プロジェクト

テオ・ヤンセン氏と語る

「未来への対話－テオ・ヤンセン学生と語る－」突撃インタビュー

—大分県を訪れてどういった印象を受けましたか？

とても優しい人たちばかりだと思ったよ。食事に行ったときに特注で小麦のパンを作ってくれたり、ワインをいただいたりしてね。こちらが興味を持つとすぐにその物をくれるから、逆に申し訳なく思ってしまったよ。

—ストランド・ビーストのそれぞれの名前の由来は何ですか？

名前を付けるときは、ラテン語の辞書を引いてその作品に合ったものをつけるんだ。シアメシスは双子という意味があるんだよ。

—ビーストを作る前はＵＦＯも作ったそうですが、難しかったですか？

とても難しかったよ。小さいものから作っていったけど、大きいものになると飛ばなかったんだ。３つ目はうまく飛んだけど、４つ目は高く飛びすぎて大変だったよ。あとは、平行に飛ばすことにとても苦労したね。

—そんなテオさんのモットーは？

モットーといわれると難しいね。僕がビーストを作る時は、チューブが自分に指示をしてくれるんだ。そのあとはいかにリアリティーのある生命を作るか。作る時はいつも危険と隣り合わせだし、よくけがをするけどそれは気にならないよ。僕はこのことに関しては中毒なんだ（笑）

私たちのぎこちない英語の質問に対しても気さくに答えてくださったテオ・ヤンセン氏。緊張していると笑わせてくれるとても素敵な人だと思った。
9月30日まで大分市美術館で開催しているテオ・ヤンセン展にも実際に足を運びたいと思う。

７月１１日（月）本学で行われた学長プロジェクト「未来への対話－テオ・ヤンセン学生と語る－」。Ｖｏｉｃｅ編集部は講義後、テオ・ヤンセン氏に直接話をお伺いすることができた。

written by 髙橋 愛実、梶原 愛理、新納 恵理加（情報コミュニケーション学科 1年）

Last Chorus♪ ～編集後記～

全ての記事を読んでもらうにはどうしたら良いのかという点で、構成を考えていくことが想像以上に大変だった。
新納 恵理加（情報コミュニケーション学科 1年）

私は今回、Voiceの制作をしてみてとても楽しかった。自分たちのしてきた活動を情報として発信出来る楽しさを感じる事が出来た。
梶野 愛衣（情報コミュニケーション学科 1年）

6人という少人数での作成となり大変でしたが、とても充実した時間を過ごすことができました。
大久保 美紀（情報コミュニケーション学科 1年）

初めて編集という作業をした。文字数が決まっていて、その決まっている文字数で文をまとめるというのはとても難しかった。
岩尾 真美（情報コミュニケーション学科 1年）

Voiceを作成するにあたって大変だったのは、何回も文章を練り直したことだ。これで少しでも文章力が身についていればなと思う。
梶原 愛理（情報コミュニケーション学科 1年）

テオ・ヤンセンさんに直接インタビューできたことがとてもいい経験になった。編集は思った以上に大変な作業だった。
髙橋 愛実（情報コミュニケーション学科 1年）

Voice
ヴォイス
大分県立芸術文化短期大学 サービスラーニング公式新聞
〒870-0833　大分市上野丘東1番11号　大分県立芸術文化短期大学
tel.097-545-0542（代表）／fax.097-545-0543
Voice 第7号　2011年9月発行